へ 13
3336
2

大正年月日寄贈

13
3336
2

朱雀蒙

斐陀匠物語巻之二

○たけだ

むさしのくにかやはらぐんに。竹芝の山人とゆふ者あり。ちゝはつまみやびゝして。光るたけをかりて。なりはひとする人の。ひめのまゝにかやよりとりあげたるが。あるひとありて。山人とゆふ者あり。おゝきなる竹の中にてよびてゆくに。よこさまに八十五歳ばかりなる。ひとの子あり。ゆゝしうかゝる。容貌居たりて。さてこれなる。甚人の未ありけるに。山里なれども。調度ちかどを。昔のあがりとぐめてみやびたる物ども。くさくさくしたる。実のひとりやう。寛くなりにけるやおとこあまたもちたる時よりこゝろ。ふとちかく

山人を見しる者を男女をいとゞ想をかけざるはなしなり。其ゆゑ同國の
廣岡の長者といふ者あり。心ひゞきしる俤人みてこのあたりなるゞけ山人を想ひ
そめていとゞ兄弟のかゝるひやんと廣ゝみちをおろなるまでゆく
遠りどとゞふせざるゆゑでいろふもしてあ我物よせんとおもひてよきつのゝで
ちゞ待わろうろ春のゆく向ゞ國とゆつる所の花咲ぬとて人ゝ遠近を
いたゞきとゝよつどひて終日あそびくらしる中よ山人も母をいざなひて高き
岡遠よ登うちまきてちゞめわゝうろ。廣岡の長者もけてうよ
幕うちまきて酒のこたのゝをねろゞ山人ゞ母をつまて家ふ来るよ
を少て醉よ無ゞて走り来くまちもち鹽の上よのぼり山人ゞ手をとゝく
てつゝ度ゝ溜息してらろゞをけゞつを情ちきゝ少人ふゝいひく
ひゝさゝゝ載れかゝり仏ゝ母を聟さめて山人よゆゞせゝくゝ

しちもさゝんとさゝゝゞ廣岡立あゞりて母をつきのけ山人を脇よさゝみてく
おのゝ幕のうちへひきつゝ行んとさゝ母ハおきあゞりてこは狼藉ありといひつ
まゞをつくを足ゝてくふをゝゞさゝけさちぎよつりどさゝえあどハ微塵よあり
てゝ飛ちりぬ母を正悪をうゝあひてうつぶゝふ倒ゝく起ゝあゞゝゞ廣岡
山人をとゝくて引ゆらんとさゝあゆふき来ゝ
頬かゞりせる男の立居ゝるゞをゝゝと出ゝ廣岡ゞき〳〵勝とりてゆんどと
うゝさせゝ三間ばかり投つけつ山人ハうわゝくて母ゞのとふよりて介抱さゝ
ゞ廣岡起あゞりてかの男よとびかゝるをひつとゝくて大地よあゞつけ幕押
を引ぬきてつゞけうちふ打ゝゝゞ強氣の廣岡もあえくとありて倒ゝ
かの男仁王ゞちよ立ゆて山人よむうひて母佐前を賀てとく家ちを逃めと
のゝよ山人ハ心せうゝゝとく母を脊よおひて岡を下りて逃ゆきゝゝ廣岡

たけ丸の
山人母を誘ひて
花見に出るを
賊徒とり子者
根岩おとび
くるしき何男
とも忍れて
つらき男生て
母子を救ひ
賊徒をあやまたず

下部ども六七人かの男をゆらじとゆうまくを幕串をとつて縦横丹
うつてまち是ぞよりつく者もさらふちく皆ちりぐゆぞ逃うせる。かの
男賈岡ゆゆしくるるぞよりてかくるやうゆは恥見せんぞといひさゐ帯
とき衣ひきたぎて衣をぞ流生よ打あげてうち笑ふ。いづくともまつぞ
帰り行る。賈岡ハ赤ちぐうゆて卧居くるを下部ら立かりさゐぐ介抱く
る生ぞ。ぞうゆくよ息ハ生られども。あらはぐらあ生ぞ。けまゆゆうかたん
ハ人ひろくとて下部ら衣をぬぎてうちきせ生ぞ。猶寒しといへぞ。ちんらく
あくてありあひくる毛氈をとりて頭よりかきせて帯ゆくるくとひき
むすびぞ賈岡よろくたちあがりて赤裸ある下部ら有ふかくるあを行
さゐ。さあぐう繪ふかきくる達磨大師の酔ち生てるぞとくちる生ぞこ生を
見る物千万くきて笑ひるくこ生あるらいよくゆくき事よ思ひて什物ひ

やんとぞ思ひくもちるるさて又畢竟ハ松光とゆうまの方へとてつる
るよ根源国をもるるゆ。ある日まゆぬまぞ。ぞ生ぞ。ぞ生ぞ。ぞ生

を見へざるかの巻を見つる黥の車をさしてとぶとゝつまで武蔵一国のうち
を尋ぬるゆゑ大方有所さまざる事あらじ汝八左の道をゆきて尋ぬ
べし吾八右の道をゝどりて行べし石濱しらつる所よ草屋の某とてまる
人あり。そこにて相あふべしとゝいへば松先例のうゑづきて立別きぬ。
墨縄八ひとりかの芦荻をおしつけつゝ道ある方をゝどり行る程流さ
ある所よ出ぬ汀流さよそひて行見るゝ柴橋ちらつゝたる所よりきん
鈎ゝてわしるあり。をゝ所をゝとゝ所の岸ふたてるも見さてがゝくく
立止りて四海を池とゝ萬民を魚とゝ何ゝあく口ざきみ々さまざまの
つるさん墨縄がゝをふりかたりつる墨縄さん人を見さまでし十五六の美女
年ゆく顔の白ひたゞひあくゆゑく見まわるきさまがゝふりをゆきらん
見しゝ人のゆゝ所さまでよく思ひめぐらまゆかの仙界ゆて谷よりおし

いさらさて人よたゞさまゆ人いひくるハ法身八極くゆゑいづくをさてゝく
ゆゝ也ゆゝ墨縄さゝよりさてゆの其八飛彈の国ある所さてゝゆ。ゆの
国義の国へ。をゝじめく所ゝくるゞいづくよをゝくるゞもあゝゆ。
いづく一夜をあらさせゝくびあんやゝいづくゆ人ゆきゆ事よゆて我ゆゝく
ゝゆゆひゝあゝゝんとて竿をあげゝいざゝてさきよ立てゆゆむらゝる
かの山中ゆて見ゝる仙よいさゝゝ達てゝまゆるさまでかあゝざけくゝそかの
仙人の生さ生ゝるあゝめゝ思ひてゝけきゝひく行く程ゆく芦ゆきゝる
門よいゝさまでゆ人柴の戸ゆひゝきて入りぬゝ八竹芝垣よりつるゆゆく
ゆ年八かの顔よゝと笑ゝゝる山人あり。墨縄ゝち見ゆきをゝゆゝ
家居のさゆちゝゝゆゆゝ見て住ゆゝたり。ゆるさ奥の方よりゆの童
ゝゝさ出ゝゝゆるゝゝゝ参ゆて。さゝも出ゆりを今やと待つけさゆひき。

母君の畳のわどよりいづくへ行せぬひしゝふり見くさせぬさぞちうきあゝうは
尋ひひつまどゝふつゝ市行方あゝゝるゝ人もあゝ君ハゆゝ市行さきをまゝゝせ
ぬふゆやとゝのふゝ少年大よおゝろきて母人あゝゝさゐゝ郷の家ゝ到りぬふ
ふゝゝよつゝふ告ぬまでハ出行ぬまざまゝておの身外ゝ出ゝゝるゝよいゝで家ゝ
ぞ出ぬふゝぎゝさゐふてゝ心あゝゝざる事よゝて顕ゝちかゝむけてゝゝて身ゝ墨
縄さてゝくふゝくゝきゝ文をゝ取ゝりゆゆのかゝ見ゝあゝゝさゐゝ市家ゝ人ゝゝく
見ゝゝて心おの身物のやゝくゝゝふゝぎ弁ゝちゆゝねど市力ゝちゝゝゝゝもく
母君の市ゆゝく尋ねゝゝゝゝ

ゆたでつ君よ天とりはらへめつる物ゆゑとゆゝめ大事とあつて疱つけで。
たゝりとあつ夜〳〵海〳〵出ぬ。ちりのぞり世よぬけ出ぬふぎき吉瑞あるべく
存ゆゝしいで少年うちあとてきゝバよき祥よあそゆくと行かゝゝひちる
わゞし隣の家あるべきゝ入きてあるきの母君ハひるの比大きなる男の
せよおひて北をさゝてさゝと行るを隣の村ある拍の草かりあく
たゝゝ丹見ゝゝと今のほゞ参りて語りてゆとゝふさてはそやつ盗
人あるべ。おひうけてとゝくてんとて。心ゝふだゝりよせ立てさるべく
時よ日ゝ生ぬ生で松とゆゝつゝねて墨縄もとゝぐ少年母ひき
そひて家を出て萩まゝきの中をワけて立里あまり行られども新
ぶよ見つけゝる夫あゝ少年母をあげて位とかぎりあゝ推ゝ参る
松も焼つゝゝぬ生で今ハせんかゝゝあゝ先立帰りて夜をありゝて後

さゞゝゆゝゝむでゝゆゞ生母ゆゝ生ゆゝ出ゆゝ出ゆゝ出

見せかくし。ちかくさゝゐ手をうごかし。見まもりて。かの男ゑ作ぞさやうの物のくぬち啞あるべし。何をか思ふ。松光包のうちをうかゝひつゝ。かの包をあらゝ。ちりもあひぢ。ちかけく。酒のこをうつ。松光包のうちをうかゝてあ手すりゐるよ。かの男酒よ醉ひぬるあや。からうちゝ。ぬて眠るさゝ。あるとき。ちづゝ手側よりて。そゝかの包ゝ手をかけく。我方へ引寄んとするよ。此男とく目をさゝて。汁かゝゐめ。みも汁つゝを盗ばんとする。みや汁つゝの内ゝ天の下よ。ちゝぶ物ちゝ器ゝ。天人仙人ゝ。ぎぬぞ。用る事ゝ。重寶ゝ。汝汁包ゝ心をかゝる。一定盗人ゝ。たゝ。汝らゝ。ぬゝ。ゝ。ゝ。

松兎
ひさごを
奪んとて
逆をゆくゆ
包を
奪ん
戦よ
供養塔

名をあらゝやつゞゝと。まめ〳〵しく奉をさゝあちてのち松光心丹おもゝ〳〵
おもゝ〳〵口をさゝらねど。まめりゐるゝ。かの男あのりなゝぬハ子細ありと
ゆゝしめ。心ゆかけゝ。わゝゝおぼさるゝ一品大切の物あゞゝ。見せまゝんと
まづゝゝと立ゝ。かの包を手より取あげゝ。松光が前よりさゝぐゝ。ひゝきて
見ぬゝゝしのふよ。松光うゝゝゝ三ゝびだらゝ。おさゞゝてさゝかの包ろ
むまびめときゝく開きゝるゝ。あゝいゝ丹。老人病者あどのふゝどゝよ。ゝく
ゝふる溺器と名づけし物ぞ。あゝりゐる。松光ハあきれゝく大口あきて。ぎ
居ゝゝかの男いよゝゝゝやりゝまゝ。都の角んどゝあき
ゝゝハ大事ゝあゝゝ。ゝ。ゝ。

とのあひだく。ゑどーとぞーせんいざくといひて引つれ行くさてゐまくく。
禅門大なる家よりくうねちりもちゆん廣間の長者うまてこうありうる松光を
小部屋よりまとおきて。かの男ハ奥の方へ行ぬ。まぞーありて奥の方まうよ
物さつぐーくまぞ松光ひそうに入くく見まぞ五十あまりある姫をとくて
あるぐ廣間の長者怒りのちりくをうかくよ儒まて笑けぐ長者ゞ云く
おのまを賞許へおびきよせーハさきに母もかくりくる郎くつまを山人が客色
ままよしくびくくをもて甚よーいひあうつまぐふつまいくぐよやぐ。
おまてよりて。おのまをかくよびさまぐ山人を我よ母くよくさあぐと
いひきうさまぐ承引せざるさてゐくくまは上のあとのぐくうち所に
命をうつぐーいうに返答せよとおををあげていぐ姫泣ちづくくを顔を
あげくさくく無慙ちるをあの者うあ我子ハ農人の家よ生まれぐ。

姓をいくぐ泣さるゞ類ひあをあくさちうあるあをを
見せんとさるゝ母ゞ命をくぐとまと我子ハ思ふまに母ちさやぐくのくだ。
廣間大よりうてよくさくぐらまめ見せてんこうつのとのぐくく樓に
ちあおけとのいぐ下人ゞ手をとりく姫をつまく階ちをのゞりかひあ
を柱よくうまくひとくく樓をりぬ樓ゞは姫ゞ声ゆく泣のくちうく
止ぐ廣間下男を呼くのひるハかまくるくみふくぐ明日にもあくぐ
をまく山人をとまを得させんとやいひもせんのくいよく今日の如くはり
ぐ母くひよ承引せぐハまをの夜を前ある川よ沉めてんとのふ松光ちう
男よりさをも不當のやつうかいうあもくて母姫ゞ命助けでやくと思ひ
せんまぐあくまぐのとの所よ行りをくう。道よりとあひ男膳を持来て
松光ゞ前よまをあ。かさくの男よさくやきいひるはかの姫をまかくゞ

とて。つまこよ大壺をさし用意せよとの。ひつけら生つまで。まよひのありさま
あく八大壺も不用よあくぬとの山。松光飯まこ〜めをまうてみかーまの
あ〜うを伺ふ。あるじハ寝所よ入こふぬ。ねどあく男女ども物ども
とうまこ〜めて各部屋よ入こふぬ松光ねもやこで一時ざうをまぐし
くるよ鐘の琴ゆ伝ゆ八子の時ちうぐ。みおんよくねりこるゆ家のうち
まづはこく庭のあ〜うよ貴の琴のまさまうまづ〜忍び生く。うやを
とほうて奥の方よ行よ男女ども。よくいねてひびきの琴のまさまを
ぬと。階子よ足をかくるこ女の琴よて盗人よとのふよ松光驚くひとちぐを
とあうく琴ふーをこ〜かの女の琴よて盗人よをあ〜ぐ我男まてあう
くうこちよりゆ〜〜ひ生く大あるひびきをかくゆぞさて八ねぐ〜あうと
さとうて又階子よかうておーせざるゆ〜心づひて上りかぐ〜〜て

物のあやも見くぐて松光窓の戸を明つまぐ。ねまちの月のひうさし入て。
そこ〜あざやうゆ見面。姫おどろきくふるひ生ぐ松光脊をぐ〜きまう
て手よくうたる縄をとく。姫不審よ思ひて。ゆうりをまぐ松光包よう
墨縄がつくまる管を生て縄あくせく例のそ〜どもあて窓ようさ〜
おく〜姫ゆ手をとうて。そ〜どのの〜、琴まぐ。ねもつまをねゆ人ちうと
心づきて手をあ〜せてをぐこ生く。かの階子をちまぐ築塀の外へ生ぬ姫を
うまく〜くもみおそろ〜くてひくきく松光ゆ方をふ〜をぐて走りゆうと
きるよ。ひやーき男のつく生まく物をぐゆいきぐ姫をひきかくえてのづく
とゆ志まぐ。ねびゆきぬ松光ハとまをきまぐ。かの階子を引あげくゆ〜の
管とあ〜て包よ入てきづうゆ階子をちうんとまるおうう。あるじ鷹岡月
さめく姫ゆ泣聲のやこ〜ハらぶうこ〜てあのこ者く階子よかうまで松光

あり。まづ囚を見あたらぬやうに盗人どもとて、あらゆるひつとらへて、
縛をしうる事ぞ。家の内のものども起出て、とよとさわぐ。廣圓盜人ども
とゝ人数つ。縄ゆてあよとて、縄をとりよせて、松光をきつかみうつて
あげつ。姫が縛もぬハ石蟲ありとて、構へあげて見るに、姫あるぞさてこそ
こゝろづかひて、多りけるありとて、いよく松光をつよくうちまをつ。あやうを
ひきの生るハ何者ぞ。いつまきのふ溺器をもち来る男のつ是来るあり
といへどいよく怒りて、かの男をもとゝくく責むもとゝ事大方あるぞさあ
やせめとへども。松光のとより物いとねだ。たゞさらうむきくちをる
あるつかくだりせめとへども一言をぶも答ざるハおそろしきやつあり。こやつ
怪人あるん母を持来りけゝかたどあるぞ。ひとき見よといへど男ども
松光がかたどをとり生来りて廣圓が前まおくこゝもぬさこうかなる

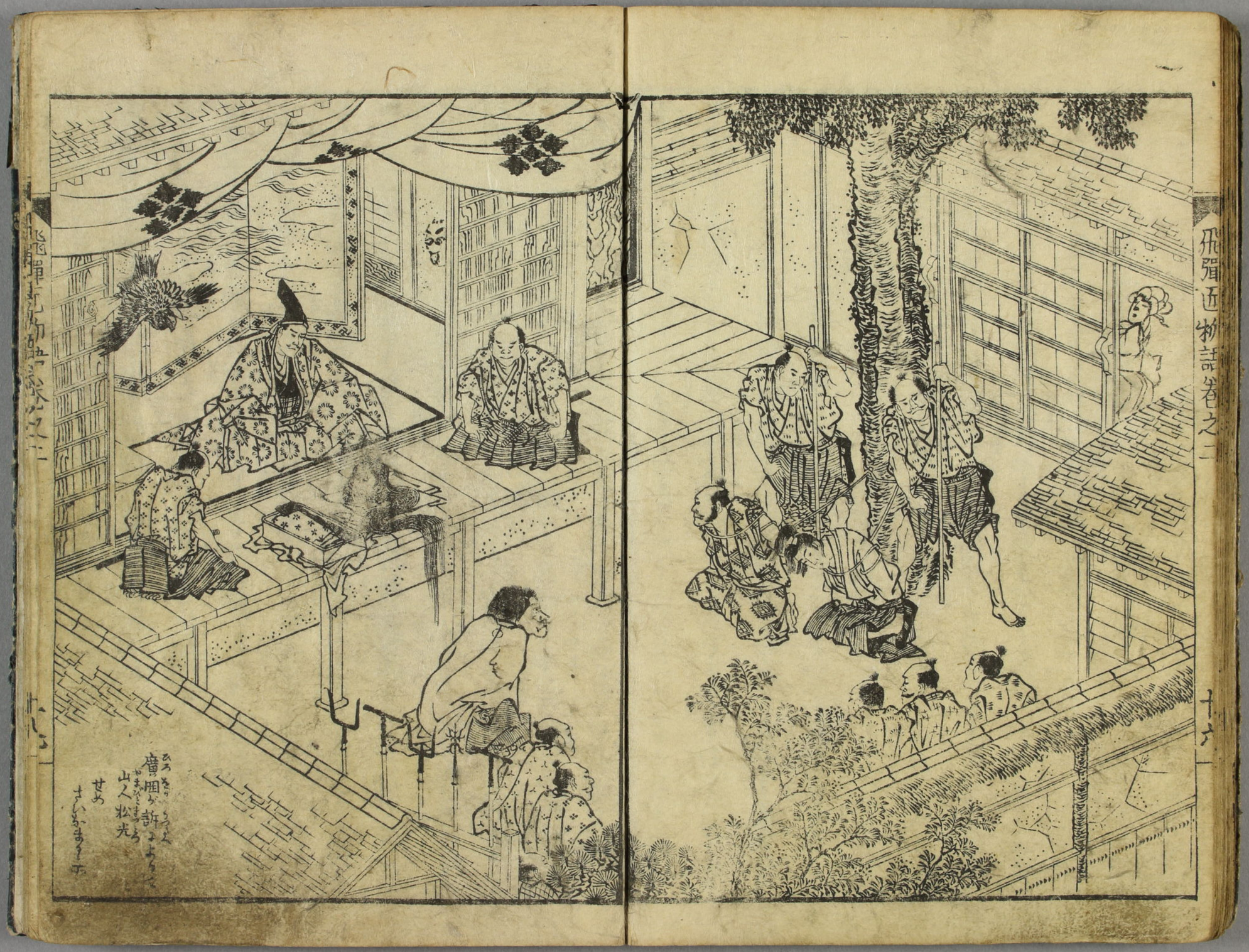
ぐしとて、おけ。年さ八生で衣二三の生にる下ゆく今きりしらし見えん
しる女の頭の生くあり。廣圓おどろきく。髪しあり火をちうづけて八生で
山人が母の頭ゆ似る生で。大ゆ驚きくる中ゆも見れめぐ世だつ生あその
夜を姫を殺さんと思ひしらしゆ。ちやつがとろせ八幸あり。さる生ゆ。いう
ある事ゆく殺しるぞ。軀ハいづ生再さてしるぞといへど。松光いへせざれど
又かのかたどをさぐ八生で一通の祝あり。讀さ八生で。此者姫ちり宮
ちるしてあり。八ゆより廣圓又惡念きざしてゆくし祝ひて。此祝を引
さきさて。よきてうぞ。あるとよろこびて先こやつをとり逃さぐぐ。
つよくうちぎておけしいひつけく。夜の明るをぞ待しうる。ゆどあく夜も
明々生で。廣圓常ゆまつまく行かよふ國の寺の目代がゆとゆ申さく。
姫の生で家ゆ凶事いできてひしいへど目代何事ぞと宜だ。廣圓ゆ

廣間竹芝が
冊を捕へおき
くるとて松光
階子を
つくりて
おとしゆる時
あやまき
男あり
冊を落ま
ひて
立のく
而

いふやう。荏原郡の竹芝の山人とやのもの。やもめ母に不孝にして。ひとりなるよ。
おとうと母をいとくむもうちうちて。殺さんとすれば。母逃出さんとおの男ず許
甘まうくいひしをよべ人を呼ひて。おの男ず家に忍ぶ。母を殺させ
ていはあり。殺しけるやうをかくめ。蓋くれ不。かの者をとめハ山人のいひつけ
まうつるよしをやつ男ず。くうあげくく浅をうつ物をいそぎ。唖のおとき
ぬねして。一言のいくくう丹付ぐ。ぞれ事おの男ず身に あづる男ず事ハ
ど。ぬ男ず母の逆ふくれを殺させつる事念あく。ぞれ。とくかのめれどを
聽よめされく。問注しくれちうあんと。ぞれ。とくやうのぶるけ目代ハ常に
賣買に銭をかりて。ちさき男あり。々男ず。ぬ殺ひぬふ事ちる男おの男
よくちくひてんといで。賣買ちぶし。かくうひあせく。おのど盗どりく
久。ぞうぬ男ずにありて守の聽より士卒まりて。松光をひきてぞ男ず。

松光ハ蓋のうちにて。ひろ男て聽のうちに入るよ。おの男ずかくうまう
くき少年のうづくぞうあうう。国の守まづ松光に向ひて。事のよをを問
ぬ。どもいくくせざ男ずにあり。少ぞるずおくく唖のまねをすると見てくうと
いひて。又少年に向ひて。汝ハ何つくあきのをる山人といふ者ありう
と問ず。少年さんぬといくく。汝ちる男をかくうひて。母を殺さんと
ちる逆罪ぬくむ。きぬあり。とくあくのまうをしとせむる。少年涙を
あづくていでさやくのくあくぬるまひ住づき。母ハきのふ男ひよくぞて
行方あくありてぬ間ぬくさづくぬを呂今の俗を呼びくぬ。ぬあ
我母ちぶ者の殺くたるぬくぬくいふ守かぬづ殺くくるハまのあくうく
見る所あくくいで。少年涙をあげくく位出さ守又ひとく汝ぶ男をかさ
ちひく母を殺さぬ事ぶくまぞやぬくのあさ

まゝき事仕りをんけ男ハいまゞ見もきゝぬ物あゝゝゝゝゝゝゝゝ守のゝゝらく
汝ゞきゝゝざる男のゝゝゝゝゝゝゝゝ


廣囲が許よりて
山人松光
せめさいなまるゝ

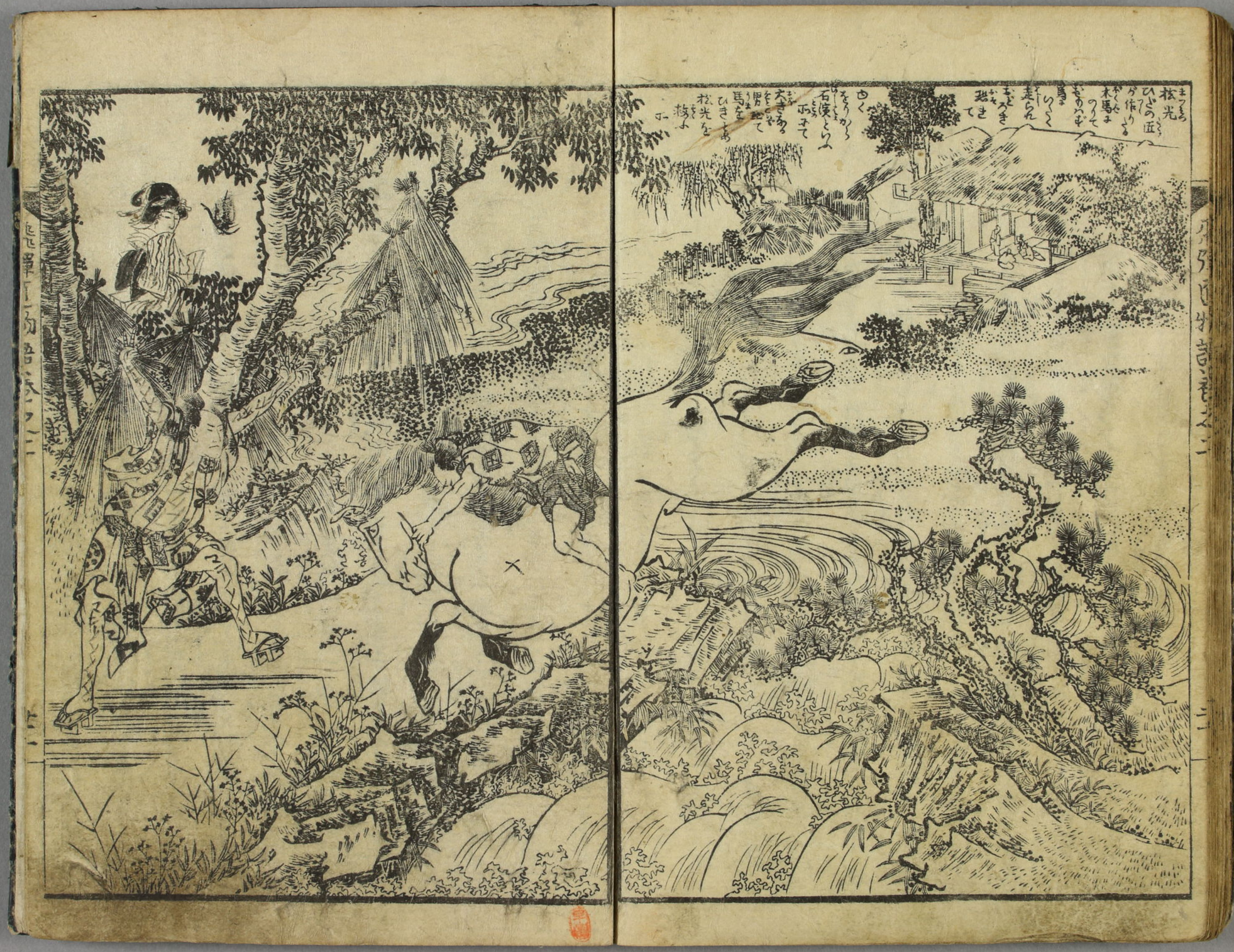
嫗が頭現よあるふあり。いづであくがたん（ぎ）ものしてだ。松光その頭ら。我
師猪名部の墨縄とやさのけく彫つくるる物あり。とのふ守あざ笑ひく
あるるのでつくるる物あるーん汝くるーさるる。まがくきそそくあとをひふあり
とのいでだ。松光其頭とう生ーぬひくおくに賢あるるとのふよ。守かの頭られ
くる器の蓋とりてつくぐ見て汁頭ひろいでだ本のて作る物あるーんとのふ。
此年きやそう至く息生くるるのびあぐりて汁頭をとも見て我母とそちさ
あるるーいひて法事かぎりあるーー松光いたくく。我師ハ飛騨の國みくあるびあき
匠みくおよそ汁人のつくるる物ハこるるのとあるーだ人の目を奪ひ事あまー
ひ。あくろるあおりて法賢あるるーいふまくーバかをげひふまくよ試んとく。
守刀をぬきてきりつくるるだ頭ハ二井口るるく中よりふき鈴ひとつ。ころげ
出ぬ。守とりあげ人るだ内ハ常の木あるり。初ハ人の頭あるーだとはーめく

さとりて。墨縄がたくみの奇ある事をあ感ーくろ。さるみーも嫗が行方
あるるぎれだ。汝をたるもりがくー。汝がやさおとくー中ハ廣囲めも召捕て
問ひおきくむーとふ。此年ひひくるる。初ハ和磐ハ墨縄ぬーの弟子あて
おくーくるるやそこの師ある墨縄ぬーハ。我ひとる母宿りみひてきのふ々ふ
母の行方あーーもくー尋ておくるーとのいだ。松光もよろあびて。母君そ
おのるたきけるりく。夜のうちよおとーー第くーーと法るだ。さて八母の仕命
怠あくおくるーーとて天を拝ーてよろ。ちぶかくるる廣囲第りて驅まかー
古屋るだ。寺のいたく。汝が家みく汁者が嫗を殺ーつるよー。汝くーく虫
くれどそはあくぬ事あるーーとのいだ。廣囲ちみがーのいで偽をやさーーく。
我国の前みく。かの者嫗が首きりゆくー山人がのひつけ出く殺ーたるよー
やさくゆひきくのふ寺さくーべ汁頭を見よくーあげやるだ。廣囲とりあげく。

行かつゝ見るに。本あく作まる物あるまでみいよゞき詞も生ずゝ口ざゝめ侍。
守沙人ざろゝゝありとのひく訴つゝゝ。そゝゝざゝゝある事ゝゝゝ。扨も汝恨を
ひゞきて山人を罪よおゝゝゝんゝゝゝゝたるゝゝんゝゝゝゝゝ廣岡おのゝの
色かちゝゝゞ又ひゝゝゝゝ什頭ハあゝゝゝゝゝゝゝ姫をさゝゝゝゝゝる
樓の下あゝきやつを捕さん時より。姫ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝるみたゞゝゞゝゝゝゝゝゝゝ松光ゞゝゝゝゝ我何のゝゝゝゝ山人ゝゝゝゝ母君
を殺さゞき汝こそかの人を殺さんとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ廣岡ゞゝゝ
らゝゝかの母を殺をゝゝゝて来るをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こうまづ怎ちく家よ効り来る事をかこちよろこびて涙をながして。母いとくるしきを松光どのよ命たまけら生。塀の外へ出こうしよ思よらば一人の男来りて我を負さくはしりたけるを丹膽心もうせて行うしよ叫へいりあるこゝろをつくして我村の口まで負ひ来りさて無くらづちともきつぎ走りさうぬ叫人のかゝ負来しざいへ人廣間よとらへら生。うきあを天道。かゝさぐ者がきくも世ふおそくるとして有く山へいひるを母人ろ訓へ殺を負の持来る事守をたゞあつまくも不審されざと語生。墨縄ついもて甚負ふ生ようより馬出るを見生ざ木ゆて作る物あり墨縄がいたくつ生子畑あり。異人より工匠の具どもをつくぬ叫具を以く物を作ぶ我心の欲さるを猶さざるを奴し。中異人のたくゝてゆひくれどいまゞ去りやいをを試さりしを丹。

母君の帰り来るよ円君の聽ゆきて事かくぐ心ぐ〜かりしを。母君廣間がたくとの極〜く聽ようくんとのゆゞかく病丹かくぬつだ出をづくり出行ゆそん事かくゝおの生又介抱して来せざ生ざ。外よあつくふくもあくざよりて母君の秘かきかゝ間よ木賞ひとつ作り出くゝ。ちくろを母荘せ為りけるよ異ひくゝたゞをざかの聽丹来ゆきて。ふくゝびあゆをふ為り来りしいは是我たくとの奇ある中ち来ゝざひと。よ神人の援ゆひくゝ道具の霊ある丹よりて生ざ〜老母をたゞあくとを。あゝくゝ感じてくゝをゞとつ墨縄松光よ向ひて汝ゞ唖の病ととよ愈〜ゆを。うをてくを生くゝ松光拷問よ作ちゞる生て事を語りてくゝたゞあ墨縄よ。別生くゝより途中大蟲を見ちゞくてざひ取くんとせくゝより廣間ゞ家よ。玉どりくゝ事まくくをくゝ語り出々生ざ。墨縄をはゞあくゝ生をて。


松光
ひごの国
の作りし
木馬に
つりて
ものハず
ひく〳〵
走られ
おどろき
恐きて
白く
をろか〳〵
石俵とらん
ハ子て
大きなる
男ハて
馬をも
ひきあ
松光を
救ふ

笑ひをぞ催しける母墨縄をたのもしきおもひくらいひるハ我子いまゞ
年たゝせまゝ去るべき親族もあくて便りあくゆゝしき法師かまゞ兄とあり
あひて今より行末をたゝうろたゝてあつらいだ墨縄がいとくかく見え
ゝ世ゝも石臼浅の縁よゆゝ今よりとかゝとよ心あつくかゝらひやまて
ゝ去ゝおの是ハ不を得てまゝ引ゆゝだ何だりの法力ハも成がゝかゝん
但今四五日ハとゞまりをりてかゝとも見給ふつき一品つくり出てまゝせん
おの是あづまはりゝゝハ故ある事まくゆゝども子細ハ是ハ口外ハ出し
がゝゝとめゝだ松光さゝ出ゝ我師あゞく物語あるあひそ和ハ又唖と成
あゝんとゝひゝ危ゞりゝ墨縄そ是より一間ある所ハ引籠りて何ハ
をゝまゝゝん鎧兜の音のゝゝゝゝだ三日とゝ月ハ出まゝ物ひとゝ作り
たゝてゝ見ゝとゝひゝく障子おゝあけゝ是ゝゝけ大きゝくたゝまゝゝき

馬のさあゞゝいゝるゝおゝきさゝるゝて立あゝゝゝく見てあゞこゝ驚ゝく
事かゞゝあゝ墨縄ひゝるゝこゝ是ハあゝこゝゆゝく諸葛孔明の作りあゝる
木馬ハ習ひくゝさゝゝたくこゝを用ひくゝひゝて庭よおゝして行まゝゞれゞ
吋馬四足を動ゝゝあゝて行さゝ生る物とゝゝまゝたゞゝゞ松光おゝゝゝき
事ハ思ひくゝおゝ是かゝゝて無くゝ見んゝゝゝゝだ墨縄おゝゝて是ハ去り
かけを是ゞ松光馬よまゝゞがゝ手綱をとゝてあゝ出まて墨縄をゝゝけく
汝手綱をゝよくゝ引事あゝ是ゝよくゝひまゝあゞゞ走る真疾るゞゝとゝゝ松光
ゝゞゝゝ手綱をゝゝくゝ門の外へあゝまゝ出ゝ拘ゝ奥あゝ事ゝゝまゝとゝ
馬ゝゝ無おゝゝよゝゝあゞゝあゝく一町だゝゝあゝ出まゝく行ゝ　つゝくゝ引
あゞゝゝく走ると数ゝゝ是ゝゝゞゝゝゝゝ

飛弾匠物語巻之二終

諸君ヨイ人の眼[illegible]

本ハ甚ダ面白ナイ

諸君ヨイ本デ耳ヲ本屋のヲヤジガ三百五十銭

デ何度かかつて帰リ一月ハ戎五十

諸君ニ賀デ諸君キヲ一ワケ